

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13178

研究課題名（和文）子どもの音楽学習における替えうたの創出・共有とその意味について

研究課題名（英文）The Meanings of Children Creating and Sharing Parody Songs

研究代表者

森 薫 (MORI, Kaoru)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：90624859

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：替えうたは、既存の歌の歌詞の一部ないし全部を改変したり、歌詞のない器楽曲の旋律にオリジナルの歌詞をつけたりしてうたわれるうたで、音楽学研究においてはわらべうたの一種と位置づけられる。本研究ではこの替えうたを子どもたちが小学校音楽科授業の最中に即興的に創出していることに着目し、その創出と、時として共有される過程を、マイクロ・エスノグラフィによって明らかにすることを試みた。教室談話研究と拡張的学習の理論に依拠した解釈的な考察を行った結論として、替えうたは多義的な音楽表現であることや、子ども同士の符牒としての機能をもつこと、彼らが替えうた創出を通じて楽曲の意味を拡張すること等の側面が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで創出された替えうたの歌詞を分類する研究はされていたものの、リアルタイムで替えうたが子どもたちによって自発的・即興的に創出され、時として共有がなされていく過程については明らかにされてこなかった。また、替えうたをつくること、つくられた替えうたが、彼らの音楽学習における楽曲への理解を助け、促進させていることも本研究によって明らかにされた。授業のなかである種の逸脱的な行為とも解釈されがちな替えうたが、子どもたちにとって重要な意味をもつものであることを学術的に示した点で意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）："Parody songs" are a type of game song, in which the original lyrics are partly or completely altered. This study focused on the process of children's making and sharing parody songs. We conducted microethnography of third-grade elementary school music classes. As a result, it was found that parody songs are a multi-sensory musical expression that function as jargons/slang between children, and that the creation and repetition of parody songs are ways of working with the "mediating artifacts" on a piece of music that has "contradictions" that need to be learned.

研究分野：音楽科教育

キーワード：替えうた マイクロ・エスノグラフィ 小学校音楽科

1. 研究開始当初の背景

替えうたは、既存の楽曲の歌詞の一部・全部の言葉を入れかえて、または歌詞の無い楽曲の旋律に言葉を当てはめてつくられるもので、民俗音楽学の分野では「わらべうたの一種」となえうた」の1タイプに分類される(小泉 1963)。

これまで民俗音楽学の分野では、替えうたに用いられる元歌には学校で教材となる唱歌や童謡のほか、コマーシャル・ソング等があり多岐に渡ることなどが小泉文夫(1963 他多数)らによって明らかにされてきた。また児童文学の分野では鳥越信(2005)によって、元歌には歌謡曲や軍歌も用いられることや、子どもたちが親や教師の前では公然にうたえない内容の替えうたをつくり、伝播させているという事実が指摘されてきた。

これらの研究においては、替えうたそのものや元歌が着目されている一方で、どのような場面で、何をしている子どもたちによってつくりだされてきたのかについては詳らかにされてきていなかった。

2. 研究の目的

本研究ではこの替えうたを子どもたちが小学校音楽科授業の最中に即興的に創出していることに着目し、その創出と、時として共有される過程を、マイクロ・エスノグラフィによって明らかにすることを試みた。いわば本研究は、子どもたちが替えうたをうたうという営みを、文脈ごと理解しようとする試みである。

教室談話研究と拡張的学習の理論に依拠した解釈的な考察を行った結論として、替えうたは多義的な音楽表現であることや、子ども同士の符牒としての機能をもつこと、彼らが替えうた創出を通じて楽曲の意味を拡張すること等の側面を明らかにすることとした。また、子どもたちが自発的に、インフォーマルにおこなっている替えうた等の音楽の創出を踏まえた音楽科授業、音楽科の学習指導について考察することも目的とした。

3. 研究の方法

- 授業観察を通じたマイクロ・エスノグラフィ
- 替えうたを中心とする、わらべうたに関する文献調査
- 欧米圏の“Play songs”に関する研究を対象とした文献調査
- 学会口頭発表、書籍・論文の執筆、講演

4. 研究成果

(1) 研究成果の全体的概要

研究成果の概要

産出された替えうたそのものだけでなく、音楽学習のプロセスのなかで子どもが自発的に替えうたを創出する過程、共有する過程について明らかにすることができた。

より具体的には、替えうたは多義的な音楽表現であること、子ども同士の符牒としての機能をもつこと、彼らが替えうた創出を通じて楽曲の意味を拡張すること等の側面を詳らかにし、替えうたをつくること、そしてつくられた替えうたが、彼らの音楽学習における楽曲への理解を助け、促進させていることも本研究によって明らかにされた。授業のなかである種の逸脱的な行為とも解釈されがちな替えうたが、子どもたちにとって重要な意味をもつものであることを学術的に示した点で意義があると考えられる。

また、替えうたやとなえうたをはじめとするわらべうたを、小学校の音楽科授業、保育所・幼稚園での音楽活動にいかにして取り入れるかについても、具体的な授業・保育プランとともに示し、書籍にて述べることができた。

さらには、小学校だけでなく幼児教育においても、そして音楽を中心としない学習の場においても、子どもたちが即興的にうたを創出することによって自らの学習の手助けとしている様子が明らかとなってきた。これについては、現在進行中の別の科学研究費課題(21K18487)において、継続して調査・研究を展開している。

(2) 各研究成果の概要

主な業績の概要を述べることで、本研究課題の成果を報告する。

主な論文の概要

) 森薫(2020)「身体性の復権へ 作曲の実践としてのハルモニア論を踏まえて」『近代教育フォーラム』29号、教育思想史学会、pp.110-116 査読あり

本研究課題での文献研究を通じて、西洋クラシック音楽を中心として展開してきた音楽科教

育において、子どもの身体性が捨象されてきたのではないかという問題意識が生じていた。そこで、2019 年度に開催された教育思想史学会のシンポジウム「ハルモニアの思想史における音楽と人間形成」へのコメント論文の形で、西洋クラシック音楽(調性音楽)の作曲の実践もまた身体性を通じた営為であり、それが、不協和音が協和音へと拡大していく音楽学習の過程ともいえるものであったことを指摘した。

さらに今後に向けた提言として、学習指導要領の文言や、音楽科教科書にみられるような教材に基づく学習活動は、グルーノウガリセットしようとした既存の「意味システム」をなぞるだけに終わってしまい、鈍化した身体がそのままにされてしまう可能性をはらんでいること、そうではなく、感覚の研ぎ澄まされた能動的な身体を構築するために、どのような学習活動が構想できるのかが音楽教育学における大きな課題であることを述べた。解決の手がかりとしては、学習者の違和感を積極的に引き出す場をデザインすること、また民俗音楽学者山田陽一の「音楽する身体」の論を踏まえることを提案した。

) 森薫(2023)「子どもの替えうた創出と共有——小学校音楽科授業の観察を通じた検討」『質的心理学研究』22 巻 1 号、日本質的心理学学会、pp.260-275 査読あり

本論文は、子どもたちが替えうたを創出してうたい、時としてそれを共有する過程と、そこにある意味を明らかにすることを目的とするものである。小学校第3 学年の音楽科授業を対象とした1 年間にわたるマイクロ・エスノグラフィをもとに、子どもたちが自発的に替えうたをうたった65 事例について量的・質的な分析・検討・考察を行った。

子どもたちはさまざまな場面で、教材となっている楽曲の旋律から替えうたを創出しており、その歌詞は、フィクション、そのときの心情、語義をもたないシラブルの3 タイプに分類された。また、合奏曲「くまのおどり」の学習活動において生じた替えうた創出と共有の事例群をもとに、教室談話研究と拡張的学習の理論に依拠した解釈的な考察を行った。

その結果、まず替えうたは、両義的な発話としての側面を有することが明らかとなった。子どもたちは、下品さや乱暴さをともなう歌詞を織り込んで替えうたを創出する、その意味で替えうたは「非教育的な」ものである。しかし一方で、替えうたの旋律は、授業で学習している楽曲のそれであり、その意味では教師の意図する学習の文脈に沿った、いわば「教育的な」ものである。藤江(2000)等の研究で明らかにされているように、授業における両義的な発話は、それが教師によって何らかの対応をされることによって、課題解決の促進や授業進行の円滑化に貢献することになる。また、両義的な発話の非論理性や不完全さが、反駁や補足、批判や支援などの何らかの対応を誘発し、コミュニケーションを豊かにする契機をつくり出す。ただし、替えうたの場合、教師が応えるのではなく、また子どもたちもそれを求める様子はみられない。替えうたは、それを聴く周囲の子どもが笑いながら聴いたり、共有したりするという形でのコミュニケーションを誘発する。これを踏まえると、子どもは第一義的には自分にとっての何らかの必要性のために両義的な発話として替えうたを創出しており、それが時に、結果として学級の子どもたちに資するものとなるのだと考えられる。子ども 教師間ではなく、子ども 子ども間の連帯をつよめるという、替えうたのもつ隠語・符牒的機能を指摘することができる。

替えうたはこのように、授業談話の一種であるが、しかしそれだけではない。教材となっている楽曲の一部が改変されて生ずる自発的な音楽的創出であり、時として子どもたちの間に共有され反復されるという側面をもつからである。子どもたちが音楽学習のなかで、既存のうたをもとに替えうたを創出し、共有するその一連のプロセスにはどのような意味があるのか。これについては、エンゲストロームによる拡張的学習(expansive learning, learning by expanding)の論を用いた説明に妥当性があると考えられた。替えうたを創出しくり返すうたうことは、【矛盾】を契機とした学習対象の楽曲への【媒介する人工物】を用いた働きかけであると考えられ、その結果として子どもたちが楽曲の意味を拡張していると解釈することが可能である。

さらに、替えうたという【媒介する人工物】の特異性、子どもたちにとっての有用性についても解釈的考察を行った。ある子どもが替えうたを創出してうたうとき、それは元となる既存の歌の歌唱と同時に行為、その声は合唱の響きのなかに、いわば「まぎれる」。レヴィティン(2010/2008)も指摘したように、子どもたちは非常に幼い頃から、替えうたをつくり出す行為をしている。慣れ親しんだ音楽的創出である替えうたを、子どもたちは学校の音楽科授業において、合唱の響きにまぎれさせながらうたい、時としてそれは別の子どもに聴かれ、まれにはあるが共有される。替えうたは「両義的な発話」で、子どもたちにとって隠語・符牒として機能することに加え、歌であり多重の属性をもつがために、子どもたちにとって特に有用な道具なのだと考えられる。フォーマルな授業の進行に真っ向から対立することなく、子どもたちはこの【媒介する人工物】をつくり出しうたい、親しみのもちにくい【対象】である元の楽曲の【矛盾】を乗り越え、その意味を拡張させているのである。

本論文は、本研究課題の最も主要な成果である。

) 森薫(2023)「幼児のパターンに関する学習における音楽的行動の発現とその意味」『日本科学教育学会年会論文集』47 号、日本科学教育学会、pp.303-304

本研究課題に取り組むなかで、子どもたちが学習の過程で替えうたにとどまらず、さまざまな即興的な「となえうた」(小泉文夫がわらべうたを10 分類したなかの1 つであり、替えうたもこの「となえうた」の一種である)を創出する場面が生じていることを見出した。そこで本論文で

は、保育所をフィールドに、幼児がパターンに関する学習に取り組むなかで、音楽的行動、とくにとなえうたがどのように発現しているのか、また、その音楽的行動が幼児のパターンへの理解にどのように関わっているのかについて検討・考察することとした。

音楽心理学、音楽文化人類学の先行研究で明らかになっている、リズムを中心とした音楽的パターンに関する知見を参照したうえで、幼稚園年長児を対象とした、色板を用いたパターン学習プログラムのビデオ観察データの分析を行った。結果として、子どもたちが学習過程でリズム・パターンを用いたとなえうたを友だちや保育者とともうたう相互行為をしながら最近接領域を形成し、自らの理解を助けていることが明らかとなった。またそのとなえうたは、日本のわらべうたのリズム・パターンの特徴を有していることも見出された。

本業績は、本研究課題のほか、科学研究費課題(21K18487)の助成も受けている。

) 森薫(2024)「音楽と算数の教科総合プログラムにおける幼児の学びと保育者の役割 基盤化された認知の理論に基づく考察」『第12回春期研究大会論文集』日本数学教育学会、pp.281-288 査読あり

上記論文)と同様に、保育所をフィールドとした論文である。子どもたちがサウンドスケープの活動をするなかで、即興的におこなう音楽的行動(エンタテインメントやアラインメント、その一種としてのとなえうた)を分析している。

論文の主目的は、就学前教育における音楽と算数の教科総合的プログラムを開発、実施し、子どもたちの学びの様子と保育者の役割について明らかにすることであった。開発したプログラムを保育園2園の年長クラスで実施し、19名の園児の参加の過程を質的に分析した。結果として、ばちを打つという状況づけられた行動のランダムな蓄積の過程で、相互作用、特にエンタテインメントやアラインメントが生起する様子や、そこから音色の違いについて考えシミュレーションする様子、さらに数量の依存関係の理解に繋がる思考をする様子もみられた。また自身らが見つけた「おきょうしつ楽器」を報告しあう際に、量の比較の素地を理解していると解釈できる姿もみられた。保育者の役割や手立てとしては、子どもたちの自作のばちや、共感的で受容的な言葉がけ、表の掲示が有効と考えられた。音楽学習に限らない、様々な領域の学習において、となえうたを含む音楽的行動が、子どもの学習を促進していることが見いだされた。

本業績は、本研究課題のほか、科学研究費課題(21K18487)の助成も受けている。

主な書籍の概要

) 森薫・城佳世編著(2019)『楽譜が読めない先生のための音楽指導の教科書』明治図書

担当：編著。執筆箇所は「はじめに」(p.3)、「音楽表現をどう考えればいい？あれもこれも、実は子どもの音楽表現！」(pp.44-45)、「音楽の知識がなくて不安 「知識」のとらえ方はさまざま！」(pp.46-47)、「3章2節 1.器楽の授業ポイント」(pp.76-79)、「2章3節 1.音楽づくりの授業ポイント」(pp.98-101)、「2章3節 3.3・4年生の音楽づくりの授業例と指導ポイント」(pp.108-113)他

本書は、小学校で全科の学習指導を行う担任教員向けに刊行しているものであり、音楽に苦手意識のある教員であっても、子どもの音楽表現を見つけ、意味づけ、価値づけながら、よりよい授業を展開できるように、様々な授業アイデアを提示している。本書のなかで、子どもの自発的な音楽表現について扱うとともに、となえうたをはじめとするわらべうたを用いた授業アイデアを複数掲載した。本研究で見出された知見を、授業アイデアに転化している。

) 竹内貞一編著(2020)『保育者養成のための音楽表現-模擬実践をとおして学ぶ-』大学図書出版

担当：分担執筆。執筆箇所は「第6章模擬実践(歌唱活動)第1節「わらべうた」で遊ぼう ひらいたひらいた」(pp.74-82)

本書は、保育所・幼稚園での音楽表現活動をどのように構想・展開するかについてまとめた、養成課程向けテキストである。このなかで、わらべうたを題材として遊び、合奏活動に発展させていくアイデアを提示した。ここでは本研究のなかでも特に文献研究の内容をもとにして、活動の提案をしている。

) 城佳世編著(2021)『ライブ！音楽指導クリニック 評価が手軽にできる音楽科授業プラン』学事出版

担当：分担執筆。執筆箇所は「第5章評価ができる鑑賞の授業のネタ 第3節違う？同じ？世界のこもりうた」(pp.101-106)、「第6章第1節わらべうたで「拍」を学ぼう！」(pp.108-113)

本書は、小・中学校の音楽科授業プランを提示するものである。この中で、世界中にあるわらべうたの一種であるこもりうたを用いた鑑賞の授業プランと、身体遊びうたである《ひらいたひらいた》の歌唱の授業プランを提示した。本研究課題のうち、特に文献研究の内容を反映させたものである。

) 森薫(2022)『子どもたちは音楽科授業にいかに参加しているか 知識と探究のマイクロ・エスノグラフィ』ミネルヴァ書房

担当：単著。

本書は、小学校の音楽科授業に、子どもたちはどのように参加しているのかという問いのもと、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の活動への子どもたちの参加の過程を、知識の使用、修正、更新、生成という視点からつまびらかにしたものである。理論的・実践的考察の双方を展開して音楽教育学分野にあたらしい知識観を提示しつつ、子どもたちの学習の現実に迫るものである。理論的考察として、認識論やそれに基づく学習論、音楽学、音楽教育哲学の所論を検討し、音楽実践における知識とはいかなるものかについて検討する。実践的考察として、多元的な知識、デューイの探究の理論を枠組みとしつつ、マイクロ・エスノグラフィの手法をもちいて子どもたちの音楽学習における知識の動態を描き出す。

実践的考察の部において、子どもたちが自発的に替えうたを創出していること、それが符牒のように機能していることを指摘しており、これについては本研究課題での知見を反映している。

本業績は主には、科学研究費の学術成果公開促進費(学術図書)の助成(21HP5193)を受けて出版したものである。

主な学会口頭発表の概要

) Kaoru MORI: Parody Songs: Children's Spontaneous Music Making and Resistance in the Classroom, 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research, Macau, 2019

) Kaoru MORI: Warabe-utas in Music Education -- Study on Children's Eudaimonia and Teachers, Symposium on Eudaimonia and Music Learning, New Jersey, 2020
コロナ禍であったためオンライン開催。日本から ZOOM にて口頭発表を行った。

上記2発表はいずれも、論文)のもととなっている。

主な講演(いずれも委嘱による)の概要

) 森薫(2019)「未就園児向け音楽教室」於・学校法人しらさぎ学園しらさぎ幼稚園、2019年9月4日、18日

親子(延べ約50組)向けに、わらべうたやとなえうた、替えうたについて講演、体験的活動を実施した社会貢献活動である。

) 森薫(2021)「音楽がつむぐ場とは何か～即興的な音楽づくりにおける身体性～」武庫川女子大学生活美学研究所主催定例研究会、2021年2月27日

本研究課題で得られた知見、特に論文)を含む講演である。主な対象は音楽療法、音楽心理学の専門家であった。

) 森薫(2020)「未就園児向け音楽教室」於・学校法人しらさぎ学園しらさぎ幼稚園、2020年9月9日、16日
上記)と同様。

) 森薫(2021)「未就園児向け音楽教室」於・学校法人しらさぎ学園しらさぎ幼稚園、2021年9月8日、13日
上記)と同様。

) 森薫(2022)「未就園児向け音楽教室」於・学校法人しらさぎ学園しらさぎ幼稚園、2022年9月6日、16日
上記)と同様。

) 森薫(2023)「未就園児向け音楽教室」於・学校法人しらさぎ学園しらさぎ幼稚園、2023年9月4日、19日
上記)と同様。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森 薫	4. 巻 22
2. 論文標題 子どもの替えうた創出と共有 - - 小学校音楽科授業の観察を通じた検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 質的心理研究	6. 最初と最後の頁 260-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/jaqp.22.1_260	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森 薫	4. 巻 29
2. 論文標題 身体性の復権へ 作曲の実践としてのハルモニア論を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 110-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 幼児のパターンに関する学習における音楽的行動の発現とその意味	4. 巻 47
2. 論文標題 幼児のパターンに関する学習における音楽的行動の発現とその意味	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本科学教育学会年会論文集	6. 最初と最後の頁 303-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森 薫・松尾 七重	4. 巻 なし
2. 論文標題 音楽と算数の教科総合プログラムにおける幼児の学びと保育者の役割 基盤化された認知の理論に基づく考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本数学教育学会 第12回春期研究大会論文集	6. 最初と最後の頁 281-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kaoru MORI
2. 発表標題 Warabe-utas in Music Education --Study on Children's Eudaimonia and Teachers' Contribution
3. 学会等名 Symposium on Eudaimonia and Music Learning May 22-23 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kaoru MORI
2. 発表標題 Parody Songs: Children's Spontaneous Music Making and Resistance in the Classroom
3. 学会等名 Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志、大澤智恵、菅裕、森薫
2. 発表標題 音楽に関する実践知研究(3) 「知覚」「思考」「行為」
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森薫
2. 発表標題 「自分にとって価値ある音や音楽」をつくる教材に関する基礎的検討 デューイの価値経験論とアルサップの音楽教育哲学を手がかりに
3. 学会等名 日本教材学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kaoru MORI
2. 発表標題 Parody Songs: Children's Spontaneous Music Making and Resistance in the Classroom
3. 学会等名 Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 津田正之・酒井美恵子編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 103
3. 書名 学びがグーンと充実する! 小学校音楽 授業プラン&ワークシート 中学年	

1. 著者名 森 薫・城 佳世編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 144
3. 書名 楽譜が読めない先生のための音楽指導の教科書	

1. 著者名 竹内 貞一編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 156
3. 書名 保育者養成のための音楽表現 - 模擬実践をとおして学ぶ	

1. 著者名 津田 正之・酒井 美恵子編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 104
3. 書名 学びがグーンと充実する! 小学校音楽 授業プラン&ワークシート 低学年	

1. 著者名 津田 正之・酒井 美恵子編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 104
3. 書名 学びがグーンと充実する! 小学校音楽 授業プラン&ワークシート 高学年	

1. 著者名 森 薫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 348
3. 書名 子どもたちは音楽科授業にいかに参加しているか 知識と探究のマイクロ・エスノグラフィ	

1. 著者名 城 佳世編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 157
3. 書名 ライブ! 音楽指導クリニック 評価が手軽にできる音楽科授業プラン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------